

真に救済された人の精神作用、その行動及びその品性

モラロジーを学び、最高道徳の実践を通して、自分が真に救われた人になるとは、どういう状態を指すのでしょうか。千九郎先生が描いたそのあり方です。原典では先に救済された姿を、次に救済されそこなっている姿を描いていますが、ここでは自分自身の気づきのヒントとなるよう、逆の順番でまとめています。

ご利用いただく上でのご注意

モラロジーや最高道徳を学び始めたとしても、自我の強さが残っている人は、とかく相手の駄目なところが目に付きます。一番やってはいけないのは、ここに示した「駄目なところ」を、自分以外の誰かに使うことです。もしこれらを、自分以外の誰かに当てはめて、その人を攻撃でもしようものなら、その段階あなたはアウトです。

モラロジーも最高道徳も、自分がその学問によって正しい考え方を理解し開発され、自分がその理解に基づく考え方や感じ方ができるようになるという、自分を育てる取り組みです。これらはすべて「あなた自身が、自分のあり方を振り替え得るために」描いたことです。

ここに示された「あり方」を見ればわかりますが、いずれも「相手はどうであっても、常に自分のあり方を正しく心地よい状態に保つことができる」のが、この学びの特徴です。その内容を学問的に理解し、理論に沿って心を働かせるとそうなるので、知徳一体（知識と心のあり方が同じ）というのです。

やらかしちゃってる自分の姿

最高道徳を学んで、少しでも「本当の意味で救済されたい」とか「自分は救済されている」と思う人は、次のような心の働き方や行動をしていないか、振り返りましょう。こうした気持ちや行動を取りそうになったときに、自分で気づいてブレーキをかけられるようになったら、一つの大きな成長といえます。

〈駄目な人図鑑〉

他人の行動が目について、高慢だとか、欲の深いとか、相手を評価してしまう。

相手に嫌なことをされても逃げたり避けないで、再び同じ嫌なことを受け入れてしまう。

目上の人と何かする際に、自分の判断で勝手に新しい事を始めてしまう。

一人よがりの熱心さや我慢、頑張りなどで、難しさや苦しさを顧みずに、軽はずみな動をとってしまう。

他の人のことを怠け者だと無能といって、バカにして笑いものにしてしまう。

善意によって誰かをもてなすときに、自分をよく見せたいなどの利己心を持つてしまう。

伝統に対する奉仕や報恩を、しかたなくやることだと感じている。

伝統に対して「こんなことが起きたらどうしよう」など実際に起きていないことを考えて不安になる。

新しいことに対して、自分の能力を誇ったり、欲に目が眩んで、自分一人の知識で決めてしまう。

当事者一人だけを安心させるだけで、子孫に至るまで幸福になるように配慮しない。

肉親や知人など、立場や利害によって、愛情の方向け方を分けている。

相手の金力・権力・その他の力に惑わされてしまう。

直情徑行など単純な正義観によって進んでしまう。

不正を働く相手に対して、へつらい迎合してしまう。

相手を緊張させて、努力させようとする。

自分の感情や利害に反すると、機会あるごとに反対し、相手がいないところでも攻撃する。

神の制裁を待てず、自分で相手を罰したり傷つけてしまう。

一時的だったり部分的な善行で終わってしまう。

知識や表面的な精神が開発されているだけで、精神の深い部分に届いていない。

誰かの相談にのるときに、自分の中にある相手への不平や悩み、心配事を他の人に話してしまう。

相手の今の形だけを見て評価し、自分の感情や利益に合えば讃め、合わなければ反対する。

他人に不平を懐かせたり、怪訝な気持ちを起こさせるような行動をとる。

自分が伝統側の場合で、自分の伝統に尽くしてくれた人達を見捨ててしまう。

目上の立場にあるとき、傲慢さによって他の達の人格を無視するような態度や行動をとる。

目下の立場で目上に反抗するときに、傲慢さをもってするので、仲間のほかに同情する人はいない。

自分を守ろうとして、感情や利害関係を意識して話したり行動するので疲れやすい。

先輩に注意されても無視してしまい、自分のことを省みない。

感激が薄いだり、地位を得ると、以前の悪い考え方や癖が再発してしまう。

千九郎先生が描く真に救われた人

本当にモラロジーによって精神が開発され、最高道徳によって救済された人とは、どんなあり方をしているのか。

千九郎先生が描いた、その人のあり方を紹介します。自分が「救済された人だ」と思っているなら、ちゃんとこういう状態でいるかどうかを省みましょう。「まだまだ」と思っているなら、この姿を目指して学びと実践を通して自分を育て、心の働き方を変えていきましょう。

〈真に救われた人のあり方〉

自分のことを常に省みられる心でいる。

嫌なことをされても円満に対応するが、同じ嫌なことに流されるとか、無意味な服従や苦痛を受け入れない。

目上の考えを尊重し、独善的な熱心さや我慢、克己心で動かない。

上司の指示を受けない間は、自分の判断で次の新しい仕事に取りかからない。

報恩と相手の心を救いたいという真の慈悲心で取り組み、心の働きも行動も自然で平和的で円満である。

救済された人の雰囲気は深い淵のように、豊かな生命観に充ちている。

救済の原動力が最高道徳の原理の全て（※）で、全人格が変化している。

伝統に対する絶対服従ということが正しく理解できている。（※）

伝統に対して公平で、従うことには迷いがない。

伝統を見捨てたり攻撃せず、とことん大切する。

伝統に問題が生じても、臨機応変に知識を用いて対応できる。

新しいことや大事なことは伝統に相談する。

伝統に直接相談できないときは、神の心や科学の原理に沿う。

人を区別せずに公平に愛する。

人類や社会の幸福と発展を願い、人格と物質を尊ぶ。

人の価値を計るときは道徳心のレベルに置く。

心に人心救済の至誠を持ちながら、現実に即して柔軟に進む。

不正な相手には、形は柔軟にしつつ徐々に精神的に救済する。

精神や行動に嘘や脅しまなく、慈悲の精神による救済あるのみ。

例) 経営者：職場の管理は抜き打ち巡回よりも普段の德育に取り組む。

例) 管理者：職場巡回を開発の機会として捉え社員を慰安し救済する。

例) 経営者と従業員：事業の発展よりも相互の幸せと安心を祈る。

相手の課題を見つけたら責めずに育てる。

課題を持つ当事者を育てようとしても、相手がきかなければ関係の深い人に迷わず伝える。

自我の強い人には、相手が怒る可能性を考慮して工夫する。

自分の行く先・居所・移動の日時を関係者に告げる。

他人の過失・欠陥や不正に不平を暴かない。

全人格の根本的な改造を経ている。

黙秘の徳が備わっている。

必ず自己に反省する。

・欠点のある目上の人には、祖先以来の徳を尊敬しつつ、最高道徳に導く。

・目下の人には、慈悲心を持って開発と救済に努める。

慈悲心とともに、確実で円満な常識が発達している。

伝統にあたる人を見捨てず、伝統も功労者を見捨てない。

立場を超えてすべての人を育てる真の親心をもつ。

すべての人間を最高道徳によって育てる心と実行とができる。

心に角を持たず、傲慢さや反抗的な態度はとらない。

自分のあり方を心配したり悩んだりしないので、あかり疲労を覚えない。

自分の欠点をアドバイスされたら、素直にあらためる。

真に最高道徳の原理によって開発されている（※）。

自分の最高品性が完成されており、従来の宗教のような偏りのある弊害を生まない。

精神的・物質的法則を体得して、生存・発達・安心・幸福となる方法を悟っている。

20251221

コメント

もうちょっと内容を整理できるような気がしているので、そのうちやります。